

女性学と私 40年の歩みから

井上輝子 *INOUE Teruko*

- 1 — 女性学との出会い
- 2 — 私の女性学宣言：『女性学とその周辺』
- 3 — 女性雑誌の比較研究：『女性雑誌を解読する』
- 4 — 女性学で女性の一生を解き明かす：『女性学への招待』
- 5 — 女性が変わり、女性学も変わった：『新・女性学への招待』
- 6 — それぞれの女性学を

私が和光大学に赴任したのは1973年、今から39年前のことです。着任した翌年の1974年に、日本初の女性学講座を開設して以来、私は女性学に関わってきました。和光大学で、いくつかの講座を開講したり、プログラムやジェンダーフォーラムを設置するほか、学会・研究会活動や社会教育を通じて、また地方自治体の女性行政を通じて、女性学の研究・教育・実践を重ねてきました。約40年の間、私は、日本の女性学とともに歩んできたように思います。

最終講義の機会に、女性学と私の40年間の軌跡を振り返ってみたいと思います。日本の女性学の大まかな流れと、和光大学における女性学の実践については、一昨(2010)年秋に、現代社会学科のシンポジウム「女性学の挑戦」でお話しし、『和光大学現代人間学部紀要4』(2011年)に掲載されていますので、それをご覧ください。今回は、私が発表した著作を基に、私自身が女性学をどのように考え、どのように関わってきたのかに焦点を当てて、お話ししたいと思います。

1 — 女性学との出会い

ウーマン・リブと私

私が女性学と出会ったのは、ウーマン・リブの運動を通じてでした。ウーマン・リブとは、女性解放運動 women's liberation の略語、women's libのカタカナ版ですが、日本では1970年に始まった、新しい女性解放運動のことを指します。戦後の日本は、憲法を初めとする法律や制度の改革によって、男女平等が法的に保障されたことになっています。戦前とちがい、女性も選挙権を得、大学にもいけるようになりました。女性差別に満ちたイエ制度も廃止されるなど、制度的には男女平等が達成されたように見えました。1970年ごろ

には、戦後改革から20年以上が経ち、高度経済成長によって生活も豊かになり、今さらコトあらためて男女平等でもないだろうという雰囲気は世の中には漂っていました。

しかし、女性たちの実感としては、男女は平等どころか、差別だらけで、女に生まれて損をしたという思いが強くありました。たとえば、小さい頃から、女の子だからといって自分だけ手伝いをさせられたとか、お兄ちゃんや弟は大学に行かせてもらえても、自分はどうせ結婚するんだからと行かせてもらえなかったとか、女性だというだけで就職試験さえ受けさせてくれない会社がいっぱいあったり、会社に入ってみれば、お茶汲みばかりさせられたり等々、挙げればキリがないほど、私たちの生活は、女性差別に囲まれていました。

こうした女性たちがおかれていた鬱屈状態の中で、もうがまんできない、何とか現状を変えねば息苦しくてたまらないと声を上げたのが、ウーマン・リブです。実はこうした女性解放運動が起きたのは、日本が初めてではありません。アメリカで、1960年代半ばに始まった運動が、またたく間に海を越えて、イギリス、フランス、ドイツなどの西欧諸国や日本にも波及したのです。こうした、いわゆる先進工業諸国では、産業が高度に発達し、一応は男女平等が達成されたかに見えましたが、どこでも女性たちは同じような問題や憤懣を抱えていたからです。この新しい女性解放運動は、以前のフェミニズム運動、それは女性参政権獲得など、男性並みの権利を女性にも与えよという運動でしたが、それと区別して、自分たちのことを、女性解放の新しい波、または第二波フェミニズムと呼んでいます。ウーマン・リブは、いわば日本版第二波フェミニズムといってよいと思います。

ウーマン・リブは、1970年から数年の間に、いくつものデモや集会をしました。女たちがなにもやら騒いでいるということで、マスコミからは「大型井戸端会議」とか「赤い気炎」とか言って、センセーショナルに取り沙汰されました。私は、たまたま70年11月のウーマン・リブの最初の大きな集会に参加したのがきっかけで、ウーマン・リブに関わることになりました。そして、この運動の中で、私は女性学に出会うのです。

Women's Studies との出会い

私が女性学のことを始めて知ったのは、1971年夏のリブ合宿の中でした。長野県の信濃平で、初めて3泊4日のリブ合宿が開かれたのですが、いくつかあった分科会の一つに、朝日新聞記者松井やよりさん（1934 - 2002年）の「アメリカ性解放運動」報告会がありました。この中で、取材して帰国したばかりの松井さんが、アメリカの大学では Women's Studies というものが始まりつつあると、ちらっと言われたのです。これを聞いて、私はそれまでなんとなくもやもやしていた、自分のやりたい研究の方向が一気に見えてきたような気がしました。

実は私は、高校時代から、女性の生き方や女性をとりまく問題に関心を持ち始め、大学時代には、自分で本を読み漁ったり、婦人問題の研究会に参加したりしていました。私が大学に入ったのは1960年、60年安保の年でしたが、当時、いわゆる婦人問題の研究と運動

は、圧倒的にマルクス主義の影響下にありました。エンゲルス『家族・私有財産及び国家の起源』、バーベル『婦人論』、井上清『日本女性史』などを、詳しく読み込んだものです。

マルクス主義を通して私は、女性の問題を社会の制度や体制の問題として捉える視点を学んだものの、マルクス主義婦人論の定式にはしっくり来ないものを感じていました。マルクス主義婦人論の定式とは、資本主義社会における婦人は、労働者として、また婦人として二重に搾取される存在である。それゆえ、婦人の真の解放は、社会主義革命において初めて達成される、というものです。私には、社会主義革命の必要性は理解できるものの、社会主義社会が実現したら、本当に女性は解放されるの？ という疑問は、ぬぐいきれませんでした。

大学1年の前半は、安保闘争の渦中で毎日が過ぎていきました。6月19日の安保条約自然承認後も三池闘争があり、その後も政暴法（政治的暴力防止法）や日韓条約問題等々政治の季節が続きました。その中で、私は運動としないで距離を置くようになっていきました。その後、私は社会学科、そして大学院に進学し、68-69年の大学闘争を経て、70年代には、研究職の道を模索していました。その時々政治課題を優先し、男女差別の問題を副次的な問題と位置づけてしまう政治運動に嫌気がさす一方で、既成の婦人問題研究にもしっくりこない気持ちを持ち続けていました。私が Women's Studies に出会ったのは、そういう時でした。

2——私の女性学宣言：『女性学とその周辺』

女性学を日本でも

和光大学に赴任した1973年の夏に、私はたまたまアメリカを旅行する機会を得ました。いくつかの大学を訪問し、Women's Studies の資料を収集するとともに、講座を開設した教員たちの話を聞いてきました。私にとっては初めての海外旅行で、しかもまだ1ドル360円の時代でしたから、出発前は心配も多かったのですが、後から思えば、思い切って出かけて、良かったです。

帰国後、私は、当時女性問題の研究拠点としていた「婦人問題懇話会」で、賀谷恵美子さんと出会いました。彼女は、カリフォルニア大学で Asian Women's Studies の講座に数年間かかわって帰国したばかりでした。日本でも Women's Studies を始めたいということで意気投合し、Women's Studies に「女性学」という訳語を当てて、「アメリカ諸大学の女性学講座」という文章を二人でまとめ、「婦人問題懇話会」の会報に掲載してもらいました。アメリカの女性学講座を紹介しつつ、「日本でも女性学を始めよう」と呼びかけたわけです。

なぜ「女性学」なのか？

Women's Studies は、1960年代後半以降の新しいフェミニズム運動（第二波フェミニズム）の学問版として、アメリカで始まったものです。客観的で中立的だと信じられてきた近代

の諸科学が、実は担い手も問題設定も男性中心に営まれており、女性の経験や関心事は学問の世界で不可視化されてきました。例えばお産の歴史や、家事労働の性格、パートタイマーの待遇や、女性雑誌の影響など、女性にかかわる領域の問題は、学問の対象とするに値しないとみなされてきました。こうした学問の男性中心主義を告発し、女性の経験と関心事を学問の対象とすることを眼目として、Women's Studies が提唱されました。

私たちがなぜ、Women's Studies に「女性学」という訳語を当てたかといえば、なによりもまず、従来の「婦人問題研究」の枠を破りたかったためです。私に言わせれば、「婦人問題研究」は、男性並みの社会的権利の獲得をめざす、第一波フェミニズムの学問版であり、男性中心の学問世界の片隅で、男性たちによってつくられた概念や理論を「婦人問題」に適用するという、きわめて慎重深いもので、学問世界自体のパラダイム転換を図るという大それた野望などは、みじんも持ち合わせていないように思えました。私自身、「婦人問題研究」の中で育てられてきたという思いが強くなり、「婦人問題研究」の歴史的意義を否定するものではありませんが、やはり、新しいフェミニズムに基づく新しい研究には、新しい名前が必要でした。

もう一つの選択肢として、「女性研究」ではダメだったのですかとよく聞かれることがあります。確かに Women's Studies を直訳すれば「女性研究」なので、それを使用してもよかったわけですが、私は男性たちによってしばしば語られてきた女性についての論（女性論）や女性についての研究（女性研究）に回収されてしまうことを恐れました。むしろ、女性たち自身の問題意識に基づく、新しい学問のディシプリンを用意したいという志をもって、「女性学」と名づけたわけです。

日本における女性学の誕生

1974年に私は、友人たちに声をかけ、「女性社会学研究会」を組織しました。当時アメリカでは、Women's Studies 関連の論文や著作が次々に蓄積されており、社会学、心理学等の文献目録に「性役割アプローチ」「フェミニストアプローチ」等の項目が登場していました。こうしたアメリカの研究状況に関する情報を収集する一方で、日本の女性に関する研究も開始しました。研究会の成果として、『女性社会学をめざして』（垣内出版）を1981年に出版しましたが、これは1970年代アメリカの研究動向を紹介したものでした。

同じ1974年に、私は和光大学人文学部人間関係学科に、「女性社会学特講」を開設し、担当しました。日本初の女性学講座といえます。

女性についての、女性のための、女性による学問

1980年に私は、女性学について、それまで書きためた文章をまとめて、『女性学とその周辺』と題して出版しました。「女性学」の名を冠した、おそらく日本で最初の本だと思えます。この本の「はじめに」で、女性学を、「女性を考察の対象とした、女性のための、女性による学問」と定義しました。

この定義の中で、「女性を対象とした考察」は、古来、特に男性たちによって、数多くなされてきました。「女性のための学」は、明治啓蒙思想家たちを初め、これまた多くの業績があります。私は大学院時代に、明治期の女性向け啓蒙雑誌『女学雑誌』の研究をしましたが、この雑誌の編集者の巖本善治は、「女学」の必要性を説き、みずから「女学子」を名のりました。巖本は「女学」を、「其の心身に付て、其の過去に付て、其の将来に付て、其の権理、地位に付て、及び其の現今に必要する雑多の事物に付て、凡そ女性に関する凡百の道理を研窮する所の学問」(『女学雑誌』111号、明治21,5,26)と定義しています。



井上輝子『女性学とその周辺』勁草書房、1980年

内容の是非は別にして、すでに、「女性のための、女性についての学」は、男性たちによって作られ、一定の蓄積をもっていたわけです。これらと区別して、私が「女性学」を名のった最大の理由は、第3のポイント、つまり「女性による学問」ということでした。これを書いた当時、私の念頭にあったのは、平塚らいてうによる『青鞥』発刊の辞です。

原始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く病人のやうな蒼白い顔の月である。私共は隠されて仕舞った我が太陽を今や取り戻さねばならぬ。「隠れたる我が太陽を、潜める天才を発現せよ」とは、私共の内に向っての不断の叫聲、押さへがたく消しがたき渴望、一切の雑多な部分的本能の統一せられたる最終の全人格的の唯一本能である。

(『青鞥』創刊号、明治44,9,1)

あまりにも有名なこの発刊の辞「原始、女性は太陽であった」は、自分が女性であることの自覚と、それを率直に表現しようとする意欲とを、社会に向けて公然と表現した文章だといえます。らいてうたちは、その表現の形式を芸術に求めたわけですが、これを学問という形でできないだろうか、というのが、私の野心でした。だから、この「女性による」は、私の女性学の原点であり、誰がなんと言おうとも譲れないポイントでした。そして、この点こそが、後にさまざまな物議をかもした点でもありましたが。

女性学をつくる

『女性学とその周辺』には、恋愛結婚イデオロギーや、女性の意識調査分析、女性をめぐるメディア文化、ウーマン・リブ論などに関して、1970年代半ばまでに書きためた論考を収録してあります。これらは、婦人問題懇話会と女性社会学研究会での発表や議論をベースにまとめたものがほとんどです。

70年代の終わりごろに、東京で女性学に関心を持つ研究者が集まり、女性学研究会が結

成されました。女性社会学研究会のメンバーも大半はこちらに合流したため、81年に『女性社会学をめざして』を刊行した後、女性社会学研究会は自然消滅しました。女性学研究会は、1980年に上智大学で公開シンポジウム「女性学をつくる」を開催し、多くの関心を集めました。このシンポジウムの記録を基に、女性学研究会は『女性学をつくる』（勁草書房）を出版し、続いて『講座女性学』全4巻を刊行するなど、女性学の研究が、しだいに定着していきました。私の研究発表と交流の場も、女性学研究会が中心になっていきました。

3——女性雑誌の比較研究：『女性雑誌を解読する』

メキシコで暮らす

私は、30代最後の年である、1981年4月から翌年3月までの1年間、メキシコ国立大学院大学（エル・コレヒオ・デ・メヒコ）アジア・北アフリカ研究センター（CEAAN）の客員教授として、メキシコで過ごしました。1970年代に結ばれた日墨文化交流協定に基づいて、毎年両国から、1名の客員教授と100名（当時）の国費留学生在が、派遣されることになっていました。その客員教授として、たまたま「日本の女性と女性運動」について話せる人ということで、私に白羽の矢が立ったわけです。メキシコについての基礎知識もなく、スペイン語も全くできなかった私にとっては、このオファーは全くの青天の霹靂で、色々と迷いましたが、結局お受けすることにし、和光大学を退職し、6歳の娘と3歳の息子を連れて、出かけたわけです。

最初の1-2ヶ月は、日本とは全くちがう生活と文化に戸惑い、言葉もわからず、体調を崩すなど、困難や苦勞が多かったですが、3ヶ月目頃からは、スペイン語も一応は通じるようになり、生活のリズムもできて、快適な日々を過ごせるようになりました。ゆったりと流れる時間とともに、自然と共生する生活は、私にはとても居心地の良いものでした。

女性雑誌の比較研究を始める

メキシコ生活が軌道に乗り始めた頃、コレヒオの日本科の教員や院生たちに呼びかけ、日本とメキシコの女性雑誌を比較する共同研究チームを立ち上げました。私はすでに、日本の女性雑誌の誌面分析や日米女性雑誌の化粧品広告の比較研究を試みていましたが、メキシコ的女性雑誌を見て、表紙や誌面構成があまりにも日本の女性雑誌と似ていることに興味を持ったのが、動機でした。

この頃、ラテンアメリカの各地で女性雑誌研究が本格化し始めていました。ベティ・フリーダン以来、アメリカ合衆国を中心に進められてきたフェミニズム・女性学的女性雑誌批判が、「女らしさ」の神話を流布する元凶として女性雑誌に焦点を当ててきたのに対し、ミッシェル・マトゥラルなどラテンアメリカのフェミニストたちが女性雑誌に着目したのは、それが果たす、資本主義ないし帝国主義体制維持のための文化装置としての機能についてでした。私が女性雑誌の比較研究を思い立った理由は、主として、この新しい研究

動向に惹かれたことがあります。

「文化的帝国主義」という言葉は、「消費社会化」「グローバルゼーション」などの用語の普及につれて、今では死語に近くなっていますが、当時の私にはとても新鮮でした。この概念を使用することで、欧米社会の価値観、しかも資本にとって有益な価値観を流布することで、多国籍企業の世界進出を促進している実態を暴き出すことが、可能になります。

欧米人(=コーカシアン)とは、肌の色も体型も違うラテンアメリカや日本の女性たちが、白人の肌色や体型をモデルにして、できるだけそれに近づくように、マックス・ファクターやメイベリンの化粧品を使ったり、毛皮の服など必要ない熱帯地方でも革コートのファッションがもてはやされるのは、まさに、多国籍企業の市場戦略の結果です。女性雑誌は、この「文化的帝国主義」の推進役として、1980年代の世界の女性文化を牽引していくことになります。私が気づいた、日本とメキシコの女性雑誌の類似性の原因は、「文化的帝国主義」という概念を使うことで、かなり説明できるわけです。

ラテンアメリカの文化センター的存在であったコレヒオの性格を反映して、共同研究チームには、メキシコ人と結婚している日本人、日本人と結婚しているフランス人、チェコ生まれのフランス人など、さまざまな民族的背景を持つ人々がいました。毎週1回コレヒオの教室に集まり、共通語の英語以外にも、日本語、スペイン語、フランス語を交えて、分析方法の検討や雑誌の具体的な分析に、白熱した議論を交わしました。私の帰国前に、シンポジウムを開催し、このチームは一旦解散しました。

女性雑誌研究会

日本に帰国した後、もう少し本格的に比較研究を始めようと考え、私は和光大学の周辺に働きかけ、女性雑誌研究会を旗揚げしました。当時学生だった若い人たちを中心に、卒業生や聴講生、後には、話を聞きつけて外部から参加してくる人も何人かおり、研究成果を本にまとめた1989年までの8年間に、総勢40人以上の方々が参加してくださいました。

1983年と1985 - 87年に、運良くトヨタ財団の助成を受け、「女性雑誌の日米墨比較研究」を実施することになります。メキシコでの共同研究をつうじて、日本もメキシコも、誌面構成、誌面内容ともに、アメリカの女性雑誌の影響下にあることがわかっていたため、今回は、新たにアメリカを加えての3国比較研究を企図しました。キンテロ・粟飯原淑恵さんら、コレヒオの共同研究者のほかに、ハワイ大学のレイノルズ・秋葉かつえさんにも入っていただき、日本・メキシコ・アメリカ3国の研究者による、国際共同研究がスタートしたわけです。

私は女性雑誌分析を通じて、①1970年代以後の性役割の流動化と再編成の状況、ならびに②文化的帝国主義の浸透の実相を明らかにしたいと考え、比較研究を組織したわけですが、具体的には、3国の主要雑誌の誌面構成の量的分析と、美容、ファッション、料理ページなどの具体的記述分析を実施しました。

その結果、①女性雑誌の誌面のほとんどが、何らかのかたちで広告を含むページになっ

ており、女性雑誌が「広告乗り物」として機能していること、②女性雑誌の言及分野は、美容、ファッション、料理など、従来から女性の性役割とされてきた分野に限定されており、政治・経済・科学などへの言及がほとんどないこと、③美容とファッション中心の雑誌が多く、「美しさ」役割の浮上を軸とする性役割の再編成がみられることなどを、明らかにすることができました。

『女性雑誌を解読する』

研究成果を、1989年に『女性雑誌を解読する— COMPAREPOLITAN日・米・メキシコ比較研究』として刊行しました。副題の COMPAREPOLITAN というのは、共同執筆者の諸橋泰樹さんが造った言葉で、「雑誌の世界比較」といった意味ですが、この造語の背景には、ちょっとしたいきさつがあります。

実は私はメキシコ滞在中に、文化的帝国主義をさまざまな角度から批判的に研究しているトランスナショナリズム研究所を訪ねたことがあります。研究所のサンタクルスとエラソという2人の女性が、女性雑誌が物を販売するための道具になっていることを実証するために、女性雑誌誌面への広告掲載量を細かに計算し、その結果を『COMPROPOLITAN』という本にまとめました。「COMPROPOLITAN」というのは、世界20数カ国で販売されている雑誌『COSMOPOLITAN』に、スペイン語の「買う」(comprar)を掛けて、皮肉たっぷりに造った言葉でした。COMPAREPOLITAN というのは、さらに、それをもじった造語です。

本書は、幸いにも第11回日本出版学会賞をいただくことができました。女性雑誌分析の手法の開発と独自の分析結果が、受賞理由だったようですが、私自身は、世代の違いや文化的背景の違いを基に、誌面やデータについて、多様な解釈を出し合い、議論しながら結論を出していった、手作りの研究プロセス自体が女性学の実践例として意味があったと考えています。

女性雑誌研究会は、この後、イギリスのフェミニストたちによるメディア批判の本 *Out of Focus* を邦訳し、『メディア・セクシズム』(垣内出版、1995)と題して出版した後、英語圏の女性雑誌研究の学習会などを続けましたが、2001年に私が海外に出かけたのを機に、活動を終了しました。

4——女性学で女性の一生を解き明かす：『女性学への招待』

女性学を進める

1980年代から90年代にかけて、私にとっては40代から50代にかけての時期ですが、私は



井上輝子・女性雑誌研究会『女性雑誌を解読する』垣内出版、1989年

女性雑誌研究会のほかに、女性学研究会や日本女性学会などを通じて、多様な分野の女性学研究者たちと出会い、互いに教えられ、刺激しあいながら、いっしょに女性学を創る作業に関わっていきました。女性学研究会では、創立以来、運営委員やジャーナル編集委員を務めましたし、90年代前半には、日本女性学会の代表幹事を2期務めるなど、女性学研究の推進に努めました。また、国立婦人教育会館（現国立女性教育会館）の女性学講座等を通じて、社会教育における女性学の普及にも協力させていただきました。一方で、自治体（特に地元川崎市）の男女平等行政にも関与し、行動計画の策定や男女共同参画センター設置に向けて、女性学の知見を政策に活かすべく力を注ぎました。「国連女性の10年」を追い風に、1980年代に日本の女性学は完全に開花し、社会的影響力を発揮しますが、私もその一翼を担ったと自負しています。

女性学で女性の一生を解き明かす

『女性雑誌を解読する』を刊行した後、私は、日本で女性学が誕生して約20年の間に、蓄積されてきた成果を1冊にまとめて紹介したいと考えました。女性学を初めて学ぶ人たちに、女性学とはどういうものなのか、何を問題にしているのかを、知ってもらうために、「女性学への招待」という題名で本を出したいと考えたわけです。

一方で、女性が生まれてから死ぬまでの各ライフステージで味わう経験の諸相を、女性学を総動員して、具体的に読み解きたいとの意図もありました。言ってみれば、一人で、女性学のすべての領域をカバーしようという大それた試みを企てたわけですが、始めてみると意外に大変で、結局「変わる／変わらない 女の一生」という副題をつけて、『女性学への招待』の初版が刊行されたのは、1992年のことでした。本の目次は、幼児期における性役割の形成に始まり、学校生活、恋愛と結婚、子産み・子育て、職業生活、主婦、更年期、高齢期、そして墓の問題で終わるという構成にしています。

キー概念としての「性役割」

『女性学への招待』の全体を貫くキーワードは、「性役割」でした。社会が女性に割り当て期待する役割と、男性に割り当て期待する役割とは、異なっています。たとえば、男性は職業活動に専念することが当然視されますが、女性の場合には、たとえ職業をもって、バリバリに実績を上げて、家事や育児をすることや、おしゃれであることが期待されるといった具合に。このように、女だから男だからという、性別を理由に割り振られた一連の性格や態度や行為の類型を、性役割と呼びます。人は、性役割に応じた振舞いをすることによって、自分が女性あるいは男性であることを、他者に対してもまた自分自身に対しても示すことができるわけです。



井上輝子『女性学への招待——変わる／変わらない 女の一生』有斐閣、1992年

この「性役割」という概念は、英語の sex role または gender role の日本語訳ですが、1970年代の女性学の中で生まれ、少なくとも80年代ごろまでは、女性学のキー概念として頻繁に使われていました。アメリカでは、女性学の代名詞として sex role approach が使われまし、日本でも、女性学関連の論文や講座のタイトルに、性役割が多用されました。

従来、生理学や心理学で行われていた「性差」研究は、ともすると、男女の差異を強調し、社会的、心理的な男女の性格や態度の違いの根拠を生物学的な性差に還元する傾向がありました。それに対して、「性役割」概念を用いることで、男女の性格や役割の違いは、生物学的・解剖学的宿命ではなく、社会的・文化的につくられたものであることを、明らかにする道が開けました。こうして女性学は、性役割の社会化のプロセスを解明することや、現代社会における男女の性役割が、よくいわれるように平等で相補的なものではなく、優劣関係や二重基準に満ちていることを暴き出すことが、できるようになりました。

女性の生涯につきまとう性役割

私の本も、第1章は性役割の説明から始め、文化人類学の研究成果を基に、男女の気質や役割の分布が、社会や文化によって異なることを紹介した後、家庭のしつけやマスメディア、学校生活を通して、子どもたちがどのように性役割を身につけていくかを、説明しています。

女性の性役割の中心には、結婚して、子どもを産み育て、主婦として家事を切り盛りすることがあったので、『女性学への招待』では、「恋愛と結婚」、「母になるということ」「主婦の1日」に、それぞれ1章ずつを当て、それぞれの性役割の問題点を指摘しています。たとえば、「結婚は女の幸せ？」という項では、近代の性別役割分業社会の下では、結婚の成否が女性の人生を左右するしくみになっていることを指摘し、さらに、「疑わしい3歳神話」や「主婦業は自律性を奪う」などの項を設けて、専業主婦や専念育児を礼賛する風潮に楔を打ちました。

老後の介護やお墓の問題については、性差別的な家制度の伝統が色濃く残っているなど、女性の人生は最初から最後まで、性役割と性差別が貫徹していることを具体的に示したつもりです。

女性の直面する性役割の全体像を明らかにしたせいか、おかげでこの本は、大学の授業や読書会のテキストとして採用され、かなり多くの方々に読んでいただきました。5年後の1997年には、女性学の新しい動向を加えて新版を出しました。

90年代には、日本のフェミニズム・女性学の蓄積を、性別、世代、国籍、文化の違いを越えて、多くの読者に共有してもらおうということで、70年代以来のフェミニズム・女性学の財産目録を作る作業が、複数おこなわれました。私自身は、上野千鶴子さん、江原由美子さんたちと一っしょに、アンソロジー『日本のフェミニズム』全7巻、別巻1(岩波書店、1994-95)ならびに『岩波 女性学事典』(岩波書店、2002)の編集にかかわりました。江原さんと二人で、『女性のデータブック』(有斐閣、1991)を編集したのも、この頃からです。

データの入れ替えの必要から、第2版を1995年、第3版を1999年、2005年に第4版を出版しています。

5——女性が変わり、女性学も変わった：『新・女性学への招待』

女性をめぐる状況の変化

1970年代初頭のウーマン・リブに始まるフェミニズムの運動は、その後、ミス・コンテスト反対、性差別的広告の批判、雇用平等法制定運動、セクシュアル・ハラスメントの告発など、多様な展開を遂げていきます。一方、性差別撤廃に向けての国連の動きに対応して、日本政府も女性差別撤廃条約を批准し、男女雇用機会均等法、育児休業法などの法整備を行い、それを受けて、地方自治体も男女平等行政を次々に展開していきます。女性学も、そうした運動や行政の推進に、色々な形で寄与しました。

こうした多方面の動きの中で、女は結婚し子どもを産み育てるのが当たり前という、性役割のステレオタイプはしだいに影を潜めていき、「男は仕事、女は家事・育児」という性別役割分業規範も、少なくとも意識の上では、緩んできました。政治や行政の場、法曹界などへの女性の進出もある程度進み、女性の活躍が話題になっていきます。産業構造の転換を背景とした、雇用の場への女性の進出も著しく、共働き世帯が着実に増加し、1990年代後半には、「男性雇用者と無業の妻からなる」片働き世帯は、少数派に転落します。

20世紀も終わる頃には、男女共同参画社会基本法が国会で全員一致で成立するなど、女性をめぐる状況の変化は、めざましいものがあります。50年代、60年代のいわゆる「ジェンダーの55年体制」(落合恵美子)の呪縛から逃れようと、70年代のウーマン・リブや女性学に関わってきた私などには、隔世の感があります。

女性学のセカンドステージとは？

1990年代には、日本の女性学の成果を世に問う作業が続く一方で、女性学がセカンドステージを迎えつつあるとの声が聞かれるようになりました。セカンドステージとは何かといえば、1つには、女性学が制度化したこと、すなわち、学会や大学等に足場を得て、研究と教育の1部門としての地位を確保したことで、女性学的なものの方が、研究者はもちろん、多くの学生や市民に普及し始めたことが挙げられます。

そのことと並行して、「性役割」ではなく「ジェンダー」を使用する人が増えたことも、大きな変化です。「性役割」概念によって、女性学が切り拓いたものは大きかったのですが、他方で、社会における個人の地位に伴う「役割」に問題を焦点化したことによる限界もあったように思います。たとえば、性役割を生み出す社会構造ですとか、ジェンダー化された言語、パーソナリティ、身体技法などに、十分な光を与えることができなかつたように思います。もともと社会学由来の概念であったため、経済学や言語学、文学研究など、他の学問諸領域が女性学に参入した時に、それらに対応できなかつた面があります。「ジェン

ダー」という広い含意をもつ概念を使用することのメリットは、冷静にみて大きかったと思われま

「ジェンダー」概念の普及とバックラッシュ

しかし、「ジェンダー」が採用された背景には、性役割や性差別では、運動的できつい感じがするのに対し、カタカナの「ジェンダー」ならば、中立的でアカデミックな匂いがして、受け入れられやすいという政治的判断が介在したことも否定できません。大学や行政の場に、女性学を浸透させるための戦略として、「ジェンダー」が使われたことも事実です。そして、自分の研究を、「女性学」ではなく、「ジェンダー研究」と名のる人たちが、急激に増えていきました。

特に1995年の北京会議の公式文書に「ジェンダー」が使われて以後は、猫も杓子も「ジェンダー」「ジェンダー」で、「性役割」という言葉は影を潜めました。2000年を過ぎた頃から、バックラッシュ派による言葉狩りによって、「ジェンダーフリー」は、ほとんど使う人がいなくなりましたが、「ジェンダー」はかろうじて生き残った感じがします。私自身は、「ジェンダー研究」へのなだれ現象をどちらかといえば冷ややかに見つ、依然として「女性学」を名のってきましたが、「ジェンダー」概念自体については、積極的な意義を認め、適宜、「性役割」と「ジェンダー」を使い分けてきました。

『新・女性学への招待』

90年代後半以降の、日本の女性と女性学の変化を受けて、私たちは以前に出した『日本のフェミニズム』に増補を加えた『新編 日本のフェミニズム』全12巻(2009-2011)を刊行し、次の世代にバトンタッチするために、昨年は全国各地で、シンポジウムやブックトークを開催してきました。

私個人の仕事としては、昨(2011)年秋に、『新・女性学への招待』を上梓しました。1つには、『女性学への招待』を刊行してから20年の間に、女性の人生の何が変わり、何が変わっていないのかを、あらためて考えてみたいということがあり、同時に、セカンドステージに入った女性学の成果を検証してみたかったという、両方の狙いがありました。そのため、女性が生まれてから死ぬまでのライフステージに章分けするという旧版の構成を踏襲しつつ、各章の内容は、歴史的記述を除いて、ほぼ全面的に書き改めました。

たとえば章立てについて、旧版では「主婦の1日」と題する章を設け、主婦論争や「主婦症候群」にかなりのページを割きましたが、今回は主婦の問題は、特に章を立てずに、結婚生活や「変わる女の一生」で少しずつとりあげ、替わりに



井上輝子『新・女性学への招待——変わる／変わらない 女の一生』有斐閣、2011年

「恋愛と結婚」の章を、「性と恋愛」「結婚の夢と現実」の2つに分けるなど、女性の生き方の変化を反映させる構成にしました。

内容面の変化で特に顕著なのは、1つには、セクシュアル・ハラスメント、ドメスティック・バイオレンスなど、女性に対する暴力の問題を、学校、職場、恋愛、結婚など、さまざまな場面で言及したこと、2つには、性役割の問題を、性別役割分業を支える賃金体系、税制、年金制度など、制度の問題としてとらえたことです。

日本の労働力全体の4割以上を女性が占めるようになったにもかかわらず、賃金の男女格差は大きく、女性の管理職比率が少ないこと。女性の生き方のステレオタイプは揺らいでいるものの、結婚しない女性やシングルマザーの生活は苦しいこと。「家」制度の縛りは薄れているように見えつつ、新たに結婚するカップルの大半が夫の姓を名のっていることなど等、一見すると変化したように見える女性の人生の内実が、実はそれほど変化していない実態が、本書を読まれた方には、理解していただけたと思います。

6——それぞれの女性学を

女性学のますますの必要性

女性学が誕生してから40年が経ち、ジェンダー研究という新たな枠組みも登場する中で、もはや女性学は不要になったのでは？ という声も耳にします。しかし私は、女性学はまだまだ必要だと考えます。

なぜなら、まず、女性をとりまく状況は変化しつつあるとはいえ、『新・女性学への招待』で示したように、依然としてさまざまな抑圧があります。法や制度の改善がいまだに不十分である上に、性の商品化にみられるように、慣習や文化の面では消費社会の進行の結果、かえって性別分化と性差別が強化されさえしている現状があります。こうした状況を変えるためには、ジェンダーの仕組みを一般的かつ抽象的に論じているだけでは、力にならないのであって、個別具体的な問題に、差別をなくそうとする立場から切り込んでいくことが必要であると思います。

たとえば、昨年(2011年)3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く福島原子力発電所の事故は、日本社会に未曾有の危機をもたらしましたが、被災者(地)の救援や復興活動に、女性の視点は欠かせないと思います。そのためには、復興の方針決定や実施のプロセスへの女性の参画が必須です。女性の視点に立った研究と実践が、改めて必要といえます。

女性の視点が必要な背景には、依然として根強い、ジェンダー(男女の二分法)の非対称性があります。「家事・育児・介護」という女性に割り振られた仕事は無報酬または僅少の報酬であり、男性の「職業」「公的工作」とはまったく違って位置づけられています。女性に期待される「女らしさ」は受動的・従属的な性格であり、「自立性」「主体性」とはしばしば矛盾し衝突します。こうした女性の不利を指摘し、女性を不利にしている仕組みを組

み換えていくためには、女性自身が声を上げていくしかないと思います。

女性としてのアイデンティティ

さらに重要なのは、大多数の女性にとって、女性であることが自分のアイデンティティの主要な部分を占めているという事実です。これは、ジェンダーの社会化が徹底している結果であるともいえますが、同時に、社会のジェンダー構成が「女性」という性別を、男性ではない特別な存在として徴づけ^{しるし}しているためでもあります。民族、階級、年齢、職業、社会的地位等の、他の属性や位置づけを超えて、女性は「女」という一律のカテゴリーで括られることがしばしばであります。女性は望むと望まないにかかわらず、自分が女性であることを頻繁に自覚させられるわけです。

このような女性としてのアイデンティティを共有する人々が多数存在するがぎり、社会において、女性として生きるとはどういうことなのか、自らの経験を語り、自分たちをとりまく状況を分析し、変革の道を探る女性学は、必要であり続けると私は考えます。

自分の経験を見直すことから始まる女性学

少なくとも現状においては、社会的に女性として生きるという経験は、男性として生きることとは大いに異なる経験です。はじめにお話ししたように、女性が日頃感じている憤懣や疑問を大事にしつつ、自分の経験を問いただすことから、女性学は始まります。この作業は、特別な専門知識を持たなくても、横文字の難しい用語を用いなくても、社会的に女性として生きてきた人ならば、誰でもできる作業です。女性学ないしジェンダー研究を、アカデミズムの世界に位置づけていく仕事も意義があると思いますし、大学や学会で地位を獲得し業績を上げる女性研究者が増えることも大事なことです。けれども、一方で、女性学の原点に帰って、女性として生きる経験を記録し、自分たちの視点（モノの見方）を鍛えて、それぞれの場で発信していくことも、とても重要な活動だと思っています。

女性というくくりで一般化することに抵抗のある人は、ご自分なりのアイデンティティを基に、包括的ではない個別の女性学をお創りになることをお奨めします。たとえば、シングルマザーの女性学とか、アイヌ民族の女性学とか、レズビアン^{レズビアン}の女性学等と、いろいろな女性学があってもよいと思います。また、たとえば、OLパワー



井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・大沢真理・加納美紀代 編『女性学事典』岩波書店、2002年
井上輝子・上野千鶴子・江原由美子・天野正子・伊藤公雄・伊藤るり・大沢真理・加納美紀代 編『新編 日本のフェミニズム』(全12巻)岩波書店、2009-2011年

でセクハラおやじを撃退するとか、「オバサン」パワーで町内会やPTAの男性中心主義を変えるのも、女性学の一つの効用だと思います。女性としての経験は一樣ではないのですから、女性学の内容も活用法も多様であるのは当然です。それから男性の方には、応用問題のつもりで、女性学の知見を活かして、ご自分の問題にとりくんでいただければと思います。

私たちの世代は私たちなりに、女性学の種を蒔きましたが、その種を育て、それぞれの花を咲かせるのは、次の世代の皆さんの仕事です。私の本を読んでくださった方々、授業を聴いてくださった方々に、それを期待して、私の最終講義を終えます。

略歴

1942年3月27日生まれ

- 1971年3月 東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学
- 1973年4月 和光大学人文学部助教授
- 1981年4月 メキシコ国立大学院大学 (El Colegio de México) 客員教授 (～1982年3月)
- 1984年4月 和光大学人文学部教授
- 1990年10月 同教務部長 (～1994年9月)
- 1996年4月 同人間関係学部教授
- 1997年10月 同図書館長 (～2000年9月)
- 2001年4月 ロンドン大学教育研究院 (～2001年11月) →メキシコ国立大学院大学アジア・アフリカ研究センター (～2002年1月) →ハワイ大学マノア校 (～2002年3月)、各客員研究員
- 2002年4月 和光大学人間関係学部人間関係学科長 (～2003年3月)
- 2003年4月 同人間関係学部長 (～2006年3月)
- 2007年4月 同現代人間学部教授、同現代人間学部現代社会学科長 (～2009年3月)
- 2007年4月 ジェンダーフォーラム代表 (～2009年3月、2010年4月～2012年3月)

研究活動

- 1970年 日本社会学会会員、日本新聞学会 (1991年日本マス・コミュニケーション学会と改称) 会員、日本出版学会会員 (1990-1992年度常任理事)
- 1971年 婦人問題懇話会会員 (1973年-2001年閉会まで幹事)
- 1974年 女性社会学研究会設立 (～1978年)
- 1978年 女性学研究会会員 (2009年閉会まで、運営委員等)
- 1979年 日本女性学会会員 (1992-1995年度、2006-2007年度、代表幹事)
- 1984-89年 国際共同研究「日墨米女性雑誌比較研究」
- 1990年 第11回日本出版学会賞受賞 (編著『女性雑誌を解説する』)
- 1995年 北京世界女性会議NGOフォーラムで、ワークショップ開催
- 1996年 国際シンポジウム「カルチュラル・スタディーズとの対話」Media, Gender and Sexuality 司会
- 1999年 コロンボ大学大学院で講演 (日本の家族、日本の女性雑誌)
- 2000年 Women's Studies in Asia 2000 (ソウル梨花女子大) で、基調講演
- 2001-02年 イギリス、メキシコ、ハワイで研究交流

社会的活動

- 1983年 6月 国立婦人教育会館女性学講座企画委員（～1985年8月）
- 1983年 9月 山川菊栄記念婦人問題研究奨励金選考委員（→1995年度から選考委員長、2007年から山川菊栄記念会代表～現在に至る）
- 1986年 9月 川崎市女性問題推進協議会委員（→1989年7月副会長～1992年11月）
- 1989年 4月 文部省社会教育審議会専門委員・教育映画等審査分科会（→1991年8月～1994年11月、生涯学習審議会専門委員）
- 1992年12月 川崎市女性行政推進協議会会長（～1996年5月まで）
- 1994年 8月 国立婦人教育会館「社会教育における女性学教育の内容と方法に関する調査研究プロジェクトチーム」座長（～1997年3月）
- 1999年12月 川崎市男女共同参画センター運営委員会委員長（～2001年12月、2004年9月～2008年8月）
- 2002年 2月 川崎市男女平等推進協議会会長（～2004年3月）
- 2003年 4月 東海ジェンダー研究所理事（現在に至る）
- 2004年 7月 川崎市制80周年記念特別賞受賞（川崎市の男女平等推進行政への貢献のため）

刊行作品年譜

- 1968年 「女学思想の形成と転回——女学雑誌社の思想史的研究」『東京大学新聞研究所紀要』第17号
- 1969年 「家庭婦人のテレビ視聴を解析する」『放送文化』第24巻第5号（吉田潤と共同執筆）
- 1969年 「巖本善治の文学論」『文学』第37巻第10号、岩波書店
- 1971年 「女のアイデンティティを求めて——中間世代の見たウーマン・リブ」『婦人問題懇話会会報』第14号（辺（ほとり）輝子の筆名使用）→井上輝子『女性学とその周辺』所収
- 1971年 「『女学雑誌』の執筆者構成——明治20年代ジャーナリズム構造解明のための試論」『出版研究』第2号、日本出版学会
- 1971年 「風化する「恋愛結婚」」（辺輝子）『婦人公論』1971年9月号→井上輝子『女性学とその周辺』所収
- 1971年 「主体的変革者の意思表示」（辺輝子）『おんなの叛逆』第3号
- 1971年 「ミニコミ・ウーマンリブの季節——報道されるリブから主張するリブへ」（辺輝子）『婦人問題懇話会会報』第15号→井上輝子『女性学とその周辺』所収
- 1972年 「現代「女」物語り——ベストセラーの女たち」（辺輝子）佐伯洋子編『女思想』、産報
- 1973年 「日本の婦人解放史——婦人解放思想の流れ」『婦人展望』1973年4月号
- 1973年 「都市化と家庭論争」『婦人問題懇話会会報』第18号
- 1973年 「女性と読書」『講座現代ジャーナリズム』第4巻（城戸又一編）、時事通信社
- 1974年 「アメリカの女性と女性解放運動」（辺輝子）『女エロス』第2号、社会評論社
- 1974年 「アメリカにおける女性学講座」（辺輝子）（賀谷恵美子と共同執筆）『婦人問題懇話会会報』第20号→『社会事業をめざした女たち』所収
- 1974年 *Women's Movement and Women's Status in Modern Japan*, Sol Tax ed. World Anthropology (The Hague)
- 1974年 「「財布のヒモ」と新聞購読の力学」『総合ジャーナリズム研究』第70号
- 1974年 「日本女論史における「女学」の位置」磯崎嘉治編『巖本善治——女学雑誌派連環』、共栄社
- 1975年 「女性意識の諸相——男性との比較分析」日本放送協会放送世論調査所編『日本人の意識』、至誠堂→井上輝子『女性学とその周辺』所収

- 1975年 「新たな女性史の構築をめざして」『思想の科学』第51号、思想の科学社 →古庄ゆき子編『資料、女性史論争』、ドメス出版、所収
- 1975年 『女性解放の思想と行動』戦前編・戦後編（田中寿美子編）（共著）〔恋愛観・結婚観の系譜〕「ウーマン・リブの思想」他〕、時事通信社
- 1976年 「現代女性をめぐる役割期待と役割葛藤」『婦人問題懇話会会報』第25号 →井上輝子『女性学とその周辺』所収
- 1978年 「女性学事始」『フェミニスト』第5号
- 1979年 『女性と天皇制』（加納実紀代編）（共著）思想の科学社〔「マイホーム主義のシンボルとしての皇室」他〕→井上輝子『女性学とその周辺』所収
- 1980年 『女性学とその周辺』、勁草書房
- 1981年 『女性学をつくる』（女性学研究会編）（共著）、勁草書房
- 1981年 『女性社会学をめざして』（女性社会学研究会編）（共著）〔「マスコミにあらわれた性役割神話の構造」他〕、垣内出版
- 1982年 *De la escuela al trabajo, un trecho dificil*（「日本女性の現状——教育と労働の場で」）FEM vol.7,no.22
- 1982年 「社会的伝達の送り手に女はなぜなれなかったのか」『あごら』第26号、BOC出版部
- 1982年 「私のみたメキシコ」『婦人問題懇話会会報』第36号
- 1982年 「山川菊栄の個性」『山川菊栄集』別巻月報、岩波書店
- 1983年 「せかいのこども、メキシコ編」『はらっぱ』第22・23・24号、乳幼児発達研究所
- 1984年 『講座女性学第1巻』（女性学研究会編）（共著）〔「マスコミと女性の現代」〕、勁草書房
- 1984年 「イリイチ女性論への疑問」『婦人問題懇話会会報』第40号
- 1984年 「「身体は素材」の演出力の時代がきた——60年代以降の女性化の意識と市場」『PENGUIN?』、現代企画室
- 1985年 「女性ジャーナリズム論」『新聞学評論』第34号、日本新聞学会
- 1985年 「戦後女性史略年表」『ジュリスト』増刊号総合特集39（女性の現在と未来）、有斐閣
- 1985年 『ラテンアメリカ——社会と女性』（国本伊代、乗浩子編）（共著）〔「女性雑誌の世界」栗飯原淑恵と共同執筆〕、新評論
- 1985年 『講座現代・女の一生——第1巻現代と女性』（共著）〔「マス・メディアがとらえる現代・女の一生」〕、岩波書店
- 1986年 『マスメディア文化と女性に関する調査研究』（神田道子らと共同執筆）〔「マスメディア接触内容と女性の意識」他〕、東京都生活文化局
- 1987年 「「女性雑誌」隆盛の意味するもの」『マスコミ市民』第221・222合併号（創刊20周年記念特大号）
- 1987年 講座女性学第4巻『女の目で見ると』（女性学研究会編）（共著）〔「女の視座をつくる」〕、勁草書房
- 1987年 「私たちにとってボーヴォワールとは何か——生きる姿勢に共感する」『女性空間』第4号、日仏女性資料センター
- 1987年 『これからの婦人』（静岡女子大学婦人教育推進委員会編）〔「女性雑誌にみる現代日本の女性文化」〕、酒井書店
- 1988年 「戦後女性雑誌盛衰記」『別冊歴史読本 歴史を変えた女たち』、新人物往来社
- 1989年 『女性雑誌を解読する——COMPAREPOLITAN日・米・メキシコ比較研究』（編著）、垣内出版
- 1989年 「「女性とメディア」研究の系譜」『女性とメディア』第1集、総合ジャーナリズム研究所

- 1990年 「女性雑誌にみるフェミニズム」『図書』487、岩波書店 →『女性とメディア』（加藤春恵子、津金澤聡広編）、世界思想社、1992年、所収
- 1990年 *Women in a Changing Society: the Japanese Scene*, UNESCO Supported Series on Women's Studies, National Women's Education Center 発行 [The role of modern journalism]
- 1990年 「メディアの性役割情報と子どもの自我形成——大学生の自己回想記分析」『女性学研究』第1号「ジェンダーと性差別」、勁草書房
- 1991年 『データにみるかわさきの女性』（共同執筆）、川崎市
- 1991年 『女性のデータブック』（江原由美子と共編著）、有斐閣
- 1991年 「女性学の先駆者としての山川菊栄」『日本婦人問題懇話会会報』第51号
- 1992年 『女性学への招待——変わる／変わらない 女の一生』、有斐閣 →97年新版
- 1992年 「メディア・セクシズムを撃つ——‘女性とメディア’研究の動向と課題」『女性学研究』第2号「女性学と政治実践」、勁草書房
- 1993年 「データにみる現代川崎の女性」（ばいでいあ和光21運営委員会編）『都市川崎を読む』
- 1994年 「青春期女子のジェンダー・アイデンティティと自己形成」（亀田温子、波田あい子、平川和子と共同執筆）『女性学研究』第3号「女性と異文化」、勁草書房
- 1994-1995年 『日本のフェミニズム』全7巻、別巻1（共編著）、岩波書店
- 1995年 「女の言葉／男の言葉——言語行動の女性学」和光大学共同研究機構委員会『東西南北1994』、和光大学総合文化研究所
- 1995年 『女性のデータブック』第2版（江原由美子と共編著）、有斐閣
- 1995年 『メディア・セクシズム』（監訳）、垣内出版
- 1995年 「家族の現在と未来」『地域と大学をむすぶ和光移動大学1994講義録 家・家族・家庭』
- 1996年 「変革への女性たちの取り組み」『総合ジャーナリズム研究』155号
- 1996年 「東大闘争からリブ、そして女性学、フェミニズム」（秋山洋子、池田祥子らと座談会）『銃後史ノート8』戦後編、インパクト出版会
- 1997年 「フェミニズムの戦後史」『和光大学人間関係学部紀要』1号・1996
- 1997年 『女性学教育／学習ハンドブック』（国立婦人教育会館編）（共著）、有斐閣 →99年新版
- 1998年 「メディアの中の女たち——女を視姦する男性誌、神話を操る女性誌」（井出祥子監修、東京女性財団編）『「ことば」に見る女性』、クレヨンハウス
- 1999年 『カルチュラル・スタディーズとの対話』（花田達朗、吉見俊哉、コリン・スパークス編）[「ジェンダー・アプローチの課題と有効性」、新曜社
- 1999年 「女性学のセカンドステージとジェンダー研究——女性学の再構築に向けて」『女性学研究』第5号「女性学の再構築」、勁草書房
- 1999年 『ビデオで女性学』（共著）、有斐閣
- 1999年 『女性のデータブック』第3版（江原由美子と共編著）、有斐閣
- 2000年 「男と女、それぞれにとっての家族」『和光大学人間関係学部紀要』4号・1999
- 2000年 『社会変革をめざした女たち』（共編著）、ドメス出版
- 2000年 『たたかう女性学へ——山川菊栄賞の歩み1981-2000』（山川菊栄記念会編）、インパクト出版会
- 2001年 「ジェンダーとメディア—雑誌の誌面を解説する」鈴木みどり編『メディア・リテラシーの現在と未来』、世界思想社
- 2002年 『岩波 女性学事典』（上野千鶴子・江原由美子他と共同編集）、岩波書店
- 2003年 「イギリス諸大学の女性学教育——その構造と課題」（国信潤子と共同執筆）『女性学』2003 (vol.10)、日本女性学会学会誌

- 2005年 『女性のデータブック』第4版 (江原由美子と共編著)、有斐閣
- 2005年 「ジェンダーフリーはなぜ叩かれるのか」『社会主義』2005年9月号、第516号、社会主義協会
- 2006年 「ウーマンリブの思想と運動——関係資料の基礎的研究」(長尾洋子・船橋邦子と共同執筆)『東西南北 2006』、和光大学総合文化研究所
- 2006年 「女性学にとってのミードとマナー」『女性学』2006 (vol.13)、日本女性学会学会誌
- 2006年 「戦後史の中の憲法——二四条を中心に」『人民の歴史学』第168号、東京歴史科学研究会
- 2006年 「「ジェンダー」「ジェンダーフリー」の使い方、使われ方」若桑みどり他編『「ジェンダー」の危機を超える!』、青弓社
- 2006年 「研究と運動をつなぐ——思想の科学と婦人問題懇話会」思想の科学研究会編『「思想の科学」50年の回想』、出版ニュース社
- 2008年 「マスメディアにおけるジェンダー表象の変遷」NHK放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』、新曜社
- 2008年 「バックラッシュによる性別二元制イデオロギーの再構築」『女性学』2008 (vol.15)、日本女性学会学会誌
- 2009年 『女性学をつなぐ——女性学研究会アーカイブ』(共著)、新水社
- 2009年-2011年 『新編日本のフェミニズム』全12巻 (共編著) (第3巻「性役割」第7巻「表現とメディア」解説)、岩波書店
- 2011年 「女性学の創出と和光大学の試み」(基調報告) [公開シンポジウム「女性学の挑戦」]『和光大学現代人間学部紀要4』
- 2011年 『新・女性学への招待』、有斐閣